

# その後の千秀地区

大徳 努

## 一 はじめに

「古き、良き横浜」（周辺の農村風景）がそのまま残されたような「まち」「千秀地区」。その、正に横浜の「ふるさと」とも言うべき地域の現状について「まち1986」で「ウォッチング」してみた。

その結果、この一見して古そうな地域は、確かに農村共同体的なしがらみを強く残しながらも、新しい芽ばえが徐々に起きつつあることも感じさせた。特に筆者が強く感じたのは、この、いかにも「静止」している

かのように思える地域にあっても、実に様々な「動き」があることであった。それは「分区分」のように外からの要因で起こる場合もあれば、団体の役員が変わることによって、その活動内容がガラッと変わってしまうこともあった。

「まち1986」では、それぞれ団体をある時点での一回きりの取材によってまとめたので、その団体の活動の流れの一断面をとらえたにすぎなかった。そこで、ここでは、特に動きの激しい自主活動グループ（千秀青少年センター利用の三団体）

のその後を中心に、「地域はたえず動いている」実態を、数少ない取材のため捕えきれないが、若干ふれてみたい。

## 二 十二年目の幕切れ

「コール・ブルーム」

活動歴十二年目を迎えていた、ママさんコーラスの「コール・ブルーム」が、昭和六十一年三月にとうとう、その活動に幕を閉じたと聞いた。メンバーに幾人か重複のあった「ひばりクラブ」の会合に、再びお邪魔

して、最後のメンバーの中の三人から、幕引きの経緯をお聞きした。

「メンバーの内、二人が、もう少しレベルの高い、大船の合唱団へ移ることを希望し、一人が退会を申し出て、とうとうメンバーが七人となり、月二千五百円の会費では指導者の先生の謝礼も払えないのでいろいろ悩み、みんなで打開策を話し合いました。解散することになりました」と当初からのメンバーである西尾さんらは寂しそうに語ってくれた。

「まち1986」でもふれたように、「広報よこはま」で二回ほど会

- 一—はじめに
- 二—十二年目の幕切れ
- 三—活動場所を変えて
- 四—昨年より若返った
- 五—地域はたえず動いている
- 六—地域に常設の情報チャンネルを

員募集したり、PTA新聞でのPRや、大正コールとのジョイント・コンサートなど、様々な手を打ってきたが、ほとんど効果なく、会員数は減少傾向で、もう打つ手がなくなったということだった。ある程度の技量の高さがあるので初心者には入りにくいということもあるだろうが、やはり人口変化の少ないこの地区では会員増加は無理だったのだろうか。

残ったメンバーの内、二人は本郷台の方の合唱団に移ったが、他のメンバーは周辺に同じ先生の指導する合唱団もあるが、その練習会場へ行くのにバスを乗り継いだりで不便であるし、また、それぞれ雰囲気が違うので加入しづらいなどの理由で、今は合唱から離れている。「再開はむずかしいでしょうね」と西尾さん。

### 三——活動場所を変えて——

#### 「ひばりクラブ」

自彊術(健康体操)のグループ「ひばりクラブ」は、「まち1986」で述べているように、千秀青少年セ

ンターについて、「一回の利用料六百円は、大正地区センターの二百円に比べ高い」「建物が古くて、きたない」などの不満を持っていた。

昭和六十一年の二月ごろ、グループの代表、大村さんの懇意にしている小雀町の品川団地内のコンビニエンスストアの店主が、「うちの倉庫の二階にある広間を使ってもいいよ」と言ってくれた。そこはジュウタン敷きで、暖房もあり暖かい。対して、千秀青少年センターはストープ一個につき百円とられるが、古い木造校舎のためストープをいくつ使っても部屋はなかなか暖まらない。渡りに船とばかりにコンビニエンスストアの二階広間を使いたしたら、春になっても、もう千秀青少年センターへ戻る気持にはなれなかったようである。店主の方では使用料はいいらないと言いが、それもまずいということ、一回四百円を払っている。こちらも会員は減少傾向なので、二百円の差は大きい。

このグループのもう一つの大きな変化は、昭和五十八年からはじめた、

養護・特別養護老人ホーム「聖母の園」の清掃ボランティアを、やはり昭和六十一年一月頃から休止していることである。理由は、ボランティア活動に消極的なメンバーがいたこともあるが、やはり会員数の減少が主な理由のようであった。現在の会員数は八人。毎週火曜の定例会の日、メンバーの内の二人が交代で、練習を休み、「聖母の園」へ手伝いに行っていたわけだが、八人の内二人が抜け、更に欠席者があった場合、体操の練習そのものが成り立たなくなってしまう、というわけである。

が、「聖母の園」の方からは、また、ぜひ来てほしい、と言われているとのこと。筆者がお邪魔した日の会合の出席者六人の間では、月に一回でもいいから会員で「聖母の園」へ行き、一部屋を借りて体操した後、皆で清掃したらいいのではないか、という意見が出ていた。

### 四——昨年より若返った——

#### 「チビッコ・クラブ」

千秀青少年センターを利用するもう一つの自主活動グループ、共同保育の「チビッコ・クラブ」は、今年もそのまま同じ場所、同じ時間に活動していた。昨年まで千秀青少年センターを週一回、定期的に利用していた三つのグループの内、今年もそこで活動しているのは、このグループだけ。変われば変わるものである。「まち1986」で述べているように、三グループの内、このグループだけが千秀青少年センターの持つイメージを積極的に評価していたことからすれば、必然的な結果なのかも知れない。

そこで、定例会合日である火曜日に、再び千秀青少年センターへ伺った。が、同じグループとはいえ、メンバーはガラッと変わった。と言うのは、去年は、三、四歳児、それもお兄さん、お姉さんのいる一番下の子が多かったので、その子たちがこの四月、幼稚園に入るとともに、必然的にこのグループから抜けることになってしまったのである。その替わりに入ってきたのは、一、二歳

児、それも初めての子供である若いお母さんが多く、そのため、お母さんの平均年齢はずっと低くなつたさうである。

昨年から継続しているお母さんは三人だけ。その内の一人で、二歳になる末っ子のくみ子ちゃんを抱える、今年の代表、古橋さんにお話を聞いた。

「今年のメンバーは笠間町、小雀町の人が多いので、火曜日は笠間町の児童公園で遊具遊び、木曜日はここ千秀青少年センターで主にドロンコ遊びをしています。それから、ここでは今年に入って二回ほど煮炊きをしました。ちよつとお金がかかるんですけど。小さい子が多いので、雨の場合は中止していますが、天候には恵まれ、今のところ、中止したのは二、三回でした」

お話を伺っているすぐ脇で、子供たちがドロンコをこね回している。

ここは水はけが悪いのか、ドロンコ遊びにはもってこいである。人は変わつても「ともかく思いっきりドロンコになって遊ばせたい」という、

このグループ結成当初の基本的考え方は受け継がれている。

地域社会研究会の取材をきっかけとして、このグループも今年から「ひばりクラブ」と同様、「母親クラブ」として年八千円の補助金を区役所からもらうようになった。しかし「昨年のメンバーがバザーを開いて残してくれた、一万五千円の繰越金を使って運営している状態で、補助金の八千円は、これから使わせてもらうことになると思いますが、八千円ぐらいでは、ちよつと少ないですね。あと変わったことといったら、県から毎月『月刊かながわ』という広報誌がきたり、講演会の案内がきたので、メンバーの一人に行つてもらつたりしましたが、その程度ですな」との話だった。

## 五——地域はたえず動いている

三つのグループそれぞれに、この一年の間だけでも大きな動きがあった。特に自主活動グループの場合、筆者の知っている限りでも、それま

で華々しく活動していたグループが、半年後には活動を停止していたという例に何回か出会った。メンバーの自由な意志による活動だからこそ、柔軟に、ある時は、大変なエネルギーを傾けて華々しく活動し、ある時にはパツと割り切つて「いち抜けた」とばかりにやめることもできるわけである。それだけ先行きのわからない、不安定な活動ともいえるし、また逆に、それだけユニークな活動を期待することもできるわけである。

が、動きがあるのは、自主活動グループだけではない。例えば、田谷長生会（老人クラブ）であるが、昭和五十八年度に、都市科学研究室が委託調査した際の田谷長生会の役員に対するヒヤリングでは、この会の主要行事として、子供会と共同の空き缶回収が上げられていた。ところが、六十年年度の筆者の取材では、田谷長生会の主要行事はカラオケであった。五十八年度の報告書のどこをめくつても、カラオケの記述はない。これは、六十年年度の会長がカラオケ

好きで、楽しい老人クラブにしたいと考え始めたことだからである。空き缶回収の方は、六十年度は、子供会の行事になっていた。

「まち1986」でユニークな団体として取り上げた「豊田地区体育団体連絡協議会」は、昭和六十一年四月、豊田地区と倉田地区に二分割され、それぞれの連合町内会の文化体育部に吸収された。これは、体育指導委員連絡協議会、青少年指導員協議会、子供会育成会、体育協会の四団体が構成団体となり、地区の体育行事のみならず、文化関係の行事をも総括するようになったことによる。

これについて倉田地区青少年指導員協議会会長の中村さんは、「昨年までは、文化関係の行事は青少年指導員だけで運営しましたが、今年は文化体育部の主催ということで、他の三団体から応援がもらえるようになり助かっております。でも、何をやるにしても他の団体の了解を取らねばならず、むずかしい面もありますね」と語る。

また、これまで豊田連合町内会の

事務局長として、その運営を切り盛りしてきた豊田吏員派出所の職員

が、この三月に退職したことについて、「吏員派出所へお邪魔してその

方に相談すると、地域の様々な情報を教えてくれました。例えば、こう

いう人を捜しているんだけど、と相談すると、それじゃ、どこそここ

んな人がいる、というふうに。だから、地域の人がみんな吏員派出所に

出かけて行く。いついつても、地域の人が誰かいる。吏員派出所がたま

り場になって、一種のコミュニティ・センターになっていたんですね。

でも、その方が退職してやめられて、嘱託の方二人になってから、皆さん

あまり行かなくなりました。すねね。私は倉田地区で、豊田吏員派出所の所管からもはずれたので、行く

理由もないけど」と残念そうに語る。残念ながら、今回はこれ以上の取

材ができません、実情を明らかにできないが、その他、町内会や各種団体に

おいても、この一年間に様々な動きがあったことが推測されるのであ

る。

## 六——地域に常設の情報チャンネルを

ここまで述べてきたことは、地域は絶えず動いている、変わっていく、

昨日の「地域」が今日の「地域」ではないし、今日の「地域」がそのま

ま明日の「地域」とは限らない、ということである。

ということでは、行政が「地域を知る」と言った場合、職員が一回きり

地域の人の話を聞いたからといって、それだけでは地域を知ったこと

にならないのではないか。絶えず地域に目を向け、絶えず地域の色々な

人と接触して、様々な情報のチャンネルを持つていることが不可欠と思

われる。そのようにして、地域の情報を蓄積してゆけば、前述の吏員派

出所の話ではないが、地域の人の要望にある程度、即応できる体制がで

きていくのではないか。(もちろん、地域の様々な団体の事務局となって

いる現在の吏員派出所のあり方が、

そのままいいということではなく、

「まち1986」で提言されている地域担当制のような組織への転換が

必要と思われる。(そうした積み重ねの中でしか、その地域に即した行

政施策は見えてこないのではないだろうか。

かく言う筆者の私は、区役所の市民課に所属しているが、今回この文章を書いてみて、何と地域の情報量

が少ない事か、痛く感じさせられた。もっと情報量があれば、もっといろ

いろな事が書けるのに。例えば、筆者は地域振興係で、自治会・町内会

や「さわやか運動」などを担当しているが、千秀地区の自治会・町内会

の、この一年間の動きについて、ほとんどわからない。いばれたことで

はないが、三つの町内会とも会長は代わってないな、ぐらいの把握状況

である。

戸塚区、人口四十五万人、十四万世帯、二十七連合町内会で、地域振

興係員四人。分区して、新戸塚区人口二十二万人、七万世帯、九連合町内会では係員四人。どこの区

でも同じだろうが、特定の地域につ

いて、細かな情報をつかむほどの余裕はなく、そういう仕事への取り組

みは難しい。与えられた事業を消化するのに追われるような状況にあ

る。連合町内会長など特定の人には頻繁に会っているのだが。地域にか

かわりのある他の課、係においても地域情報の把握という意味では状況

は似たようなものであろう。

例えば、西区(人口八万人、三万世帯、六連合町内会)の市民課地域

振興係では、六連合町内会それぞれ

の月一回の定例会に、四人の職員が

手分けして、二カ月に一回は誰かが

出席するようにしているという。あ

る連合町内会についてはこの職員が、自然に担当のようになり、その

連合町内会に属する単位町内会長の名前と顔は、ほぼ一致してくるようになってくる。すると、その地区の町内会長が何か区役所に相談がある場合、まず第一に、顔見知りのその職員のところへやってくる。また、地域振興係の様々な事業について、ある特定の地区において実施する場

合も、その地区担当の職員が窓口になるという。さわやか運動の担当者も、交通安全運動の担当者も、自分の担当業務とは別に「地区」を受けて持っているわけである。

しかしながら「まち1986」で

提言されている「地区担当制」とは各種団体や自主活動、あるいはもつと広く、環境や歴史なども含めた、トータルな意味での「地区」の担当制である。町内会だけでなく、様々な情報のチャンネルが必要なのだ。

市民に一番近いはずの区役所、わけても「市民」課の実情がこんな風で、どうして行政は「地域」を語る事ができるのでしょうか。筆者も行政機関の一員として大いに反省したい。

今回、「地域社会研究会」という場が与えられ、ある程度地域に入ることができたが、こうした事を日常の業務の中でできることを願ってやまない。

八戸塚区市民課地域振興係V